

## 1 「霊山」英彦山

英彦山は北岳(1192M)・中岳(1188M)・南岳(1199.6M)の三つの山頂を持ち、福岡県内では釈迦岳(1231M)に次ぐ標高を誇る。山域は福岡県と大分県の県境未確定地域となっている。山の中腹720m近辺に英彦山神宮奉幣殿があり、多くの参拝客が訪れる。山頂には上宮がある。2005年(平成17年)10月には、英彦山神宮へ続く参道沿いに、参道起点の銅の鳥居横から英彦山花公園を經由して参道終点の英彦山神宮奉幣殿へ至る全長849mのスロープカーが完成し、英彦山神宮奉幣殿まで約15分で行けるようになった。英彦山は羽黒山(山形県)・熊野大峰山(奈良県)とともに「日本三大修験山」に数えられ、山伏の坊舎跡など往時をしのぶ史跡が残る。英彦山の開山は、継体天皇の25年(531年)北魏の僧善正上人(ぜんしょうしょうにん)の入山に始まる。さらに日田藤山村の恒雄が善正に師事して忍辱(にんにく)上人と称し、彦山霊仙寺の基となる草庵を開いたと伝えられている。この霊仙寺は明治の神仏分離までは、天台修験の別格本山として栄えていたが、以降旧境内地が英彦山神社となった。現在、霊仙寺の法灯を受け継ぎ、新たに霊泉寺として復興して、銅鳥居(かねのとりい)のすぐ右側にある。神話では天照大神の子が来臨して鎮座したので「日子山」となったといわれている。平安時代の弘仁(こうじん)10年(819年)、法蓮(ほうれん)上人が嵯峨天皇の勅令で上洛し、日子山を「彦山」に改め、七里四方に及ぶ寺領を賜る勅願寺になる。その後、鎌倉時代までに49の窟が整備され(「彦山流記」1213年)、山伏の修業が盛んになる。室町時代になると英彦山は、神事色が強まり、峰入りという修験道独特の修業が始まるようになった。英彦山より、宝満山、福智山に出て、得度を積む修業が始まった。戦国時代になると、各大名は血族を彦山座主に据えようと争いがおこり、特に豊後の大友宗麟との確執が大きく、多くの堂宇(どうう)が焼き払われてしまった。その後、豊臣秀吉の九州平定の折に、七里四方の神領すべてを没収されてしまった。江戸時代に入ると、小倉藩主細川忠興や佐賀藩主鍋島勝茂らの各地大名から多大な庇護を受けた。参道にある銅鳥居は寛永14年(1637年)にその鍋島勝茂によって建立された青銅製の鳥居である。彦山は平安時代以来、京都聖護院(しょうごいん)の末寺という扱いであったが、聖護院を相手に訴訟を起こして勝訴し、元禄9年(1696年)に幕府から「天台修験別格本山」として公認された。寛文11年(1671年)には、小笠原氏が門前集落のほぼ中央部に町屋五十軒の「彦山町」を新設した。宿屋や商店の他芝居小屋まであり、参拝客の息抜きの場としてたいへん賑わったという。宝永年間(1704~1711年)に彦山の人口は最高に達した。坊舎や庵室の数は557、僧俗併せた総人口は3,015人という記録が残っている。享保14年(1729年)には、霊元法皇より「英」の字を賜り、以後「英彦山」と表記するようになった。この頃が英彦山の最も栄えた時期である。英彦山が栄えた理由の一つとして豊かな経済力が考えられる。前述のように江戸時代の英彦山領は戦国時代以前に比べて大幅に削減され、小笠原藩と細川藩からの布施米は300石程度であった。そこで英彦山山伏は九州各国だけでなく、海を越えて周防・長門国(山口県)

や伊予・讃岐国（愛媛県・香川県）まで回国をして檀家を増やすことに努めた。英彦山修験道が崩壊する寸前の明治 7 年の記録を見ると、英彦山の坊舎が持つ檀家総数は 346,209 軒であった。江戸時代の最盛期にはもっと檀家の数は多かったと推測される。山伏達はこうした檀家を回って加持祈禱（かじきとう）を行い、お札を配ってお布施を受け取った。また、各坊舎には秘伝の薬があって、山伏は薬の販売も行っていた。研究によれば、檀家から上がるお布施の総収入は七里四方の寺領を持っていた時代よりもはるかに大きかったという。

## 2 大会コースのルートガイド 太字下線は主要地点

英彦山青年の家を出発し九州自然歩道に入ると、右が鷹巣原駐車場、左が高住神社になっているので左に進む。この自然歩道の区間はヒノキも混じるが、大半はスギの植林地帯となりこの中を歩く。途中車道に降りる場所があるが、そのまま自然歩道を歩いていくと途中から石畳の道となる。石畳が不安定になっている所もあるので注意しながら進んでいくと間もなく歩道の終点から国道に出る。この国道は国道500号線で、左が英彦山青年の家、右が高住神社方面になっているので右に進む。時折車も通行するので注意して通行していきと高住神社（豊前坊）に到着する。駐車場にはトイレがある。この場所は、サクラの開花時期やイロハモミジの紅葉時期は多くの観光客が訪れる場所である。右側の神社に進むとそのまま登山道になり北岳へと向かう。今回は薬師峠方面に進むので、そのまま国道を直進しよう。車道の脇にはマツカゼソウやナガバヤブマオが多くみられる。これらはシカが全く食べないため急速に増加している。しばらく歩くと左に県道451号線があり、これは油木ダム方面に行くので間違えないように右方向の国道を進む。この辺りからはビュート地形が特徴的な鷹ノ巣山が目の前に見え、登山意欲をそそられる。その先すぐ左側に数台止められる駐車場があり、道を挟んで右側にコンクリートで舗装された林道がある。ここまで国道を歩いてきたが、英彦山青年の家からここまでの道は九州自然歩道に指定してある。ここで、その九州自然歩道と別れ、右の林道へと入る。車が通行できないようにゲートがあるのでゲートの脇から進んでいく。舗装路を進んでいくと左に鷹ノ巣山へと登る登山口がある。そのまま進むと切り通しされた薬師峠に到着する。

さらにここを下っていくと右側に裏英彦山登山口の看板があるので、見落とさないように注意して裏英彦山道に入ろう。最初はスギの植林地帯を歩く。登山道にスギの倒木があり迂回しながら進むので、ルートから外れないように確認しながら進んでいく。しばらく登っていくと、スギからヒノキの割合が多くなってくるので、2つの木の違いが確認できる。スギ・ヒノキの植林地帯を過ぎると、ミズナラやシロモジ等の自然林になってくる。また、この辺りから後ろを振り返ると鷹ノ巣山が見えてくる。一旦尾根に出て進むとすぐに直線の尾根線上に北岳分岐が現れるが、左方向にトラバースしてケルンの谷方面へ進む。ここからは見事な自然林の中を、谷と尾根の張りだしを繰り返してトラバースしながら進んでいく。特にブナ・モミ・ツガの大木が圧倒的な存在感を出している。足元は時折岩場となっており、浮石の可能性もあるので声を掛けあいながら進もう。また、数カ所登山道が不明瞭なところがあるのでケルンや登山道の目印を確認しながら歩いていこう。

しばらく歩くと、山とは反対側に登山道が左にカーブしている。ここを曲がるとすぐに

右下方面にケルンの谷まで下りとなる。歩行中に落石させないように、もし落石させたり、落石に気づいたりしたら「ラク！」の掛け声で周囲に知らせて欲しい。谷までたどり着いたら名前の通りケルンがいくつもあり、ケルンの谷の看板が設置されている。看板の後ろの大岩から生えているシオジが印象的だ。他にも3枚の小葉がつくミツデカエデも見られる。

ケルンの谷を通過すると再び登りになる。籠こもり水みず峠方面へと進んでいくと、すぐに分岐となり左が籠水峠、右が南岳方面となるので右に進む。しばらく歩いていくと2つ沢の出会いとなる。ここを右側の沢に沿うように登っていく。登りつめると急登が緩やかになり、辺りにはツクシシクナゲやアブラチャンの群生が広がっている。このまま中岳と南岳の鞍部を目指して進んでいく。ここから先は岩場で道が不明瞭な場所があるので目印をしっかりと確認しながら進んで欲しい。中岳と南岳の鞍部が見えてくると最後の登りとなる。距離は短いがこのコースの最大の急登となるので、最大限の注意を払って登る。また、足元にはアザミが点在しており、不用意に手をつくすとトゲで怪我するので手袋を着用し注意して進んで欲しい。急登を登りつめると中岳と南岳の鞍部に到着する。

尾根筋にはブナ・アブラチャン・ムシカリが目引く。右が中岳、左が南岳となっているので左に進む。すぐに左に南岳を巻く迂回路があるが、山頂に向かうのでまっすぐ登っていく。登り始めると、これから令和7年度まで改修予定の上宮が後方に見える。そのまま登りつめると英彦山南岳となる。南岳は英彦山の最高峰で1199.5mあるが、木々に囲まれていて展望はあまり望めない。以前はすぐ下に展望台があり、展望台に上がると周囲の山々を見渡せたが、現在は撤去されてコンクリートの基礎だけが残っている。南岳からは直進して材木石方面へ下っていくルートがあるが、鎖場があり隊行動には適さないので、今登ってきた道をピストンして迂回路へ向かう。引き返して、鞍部の手前から大きく右に進路を変え巻き道へと進んでいく。途中崩落している場所があるので慎重に進もう。そのまま歩いていくと、右側から山頂から下りてくる登山道と合流する。この後も鎖場を通過するので慎重に進もう。鎖場付近は展望が開けており、正面に岳滅鬼山・岳滅鬼岳の稜線がよく見える。岩場を通過後は目の前が大きな谷になっているので踏み外さないよう注意して下りる。谷の先に見える尾根は中岳コースで上宮に向かう正面道がある。さらに進んでいくと、一旦尾根から外れてトラバースしていく。この辺りは、春には白い花が登山道を覆いつくすように咲くハイノキが群生している。ここを下ると展望がよい岩場横を通過する。さらに進んで行くと目の前に大きなスギが現れる。スギの横を通過してさらに進むと材木石に到着する。

材木石はマグマが急に冷えて固まったときにできた安山岩の柱状節理で、材木を積み重ねたように見えることから、このように呼ばれている。この付近はガレ場となっており、ここも落石に注意して進む。ガレ場を過ぎるとハウノキやイヌブナなどが見られ少しずつ植生が変化していく。また、ミヤマクマワラビも点在している。しばらく歩くと右側に三呼峠分岐が現れるが、一つ目は通過してさらに直進すると右側に2つ目の三呼峠分岐となる。このまま直進すると200m程先に鬼杉があるが、今回はここで右折する。馬の背の脇の岩場に設置されている鎖と刻んでいるステップを使って登っていくと、大南神社が目の前に現れる。大南神社から右へ進んで行き、トラバースに設置された木道を進んでいくと、先程の1つ目の三呼峠分岐からきた道と合流する。ここを左折しアップダウンを数

回繰り返しながら衣が池、四王寺の滝分岐、さらに進んで行くと、右に世界最大の梵字岩への分岐を通過する。この区間の植生はスギの植林地帯やモミ、ツガがある。三呼峠分岐に到着すると、左が玉屋神社方面、右が奉幣殿方面となっているので右に進む。右の虚空蔵分岐を通過し進んで行くと、昔は宿坊があった智室谷遺跡の石垣跡や石段が現れる。遺跡の途中で左に学問神社分岐を通過する。さらに進んで行くと、左に九大生物研究所分岐を通過する。野鳥観察小屋を過ぎたあたりから前方に奉幣殿が見えてくる。この付近の植生はイチョウが目立つ。石の階段の踊り場に到着すると、右への登りが中岳上宮方面で左に下るとすぐに奉幣殿である。左の階段を下っていくと脇にあるツクシシヤクナゲを見ながら奉幣殿に到着する。階段が終了すると右に奉幣殿、左には天ノ水分神（あめのみくまりのかみ）と呼ばれる湧水と池、その奥にはヒコサンヒメシヤラ、さらに奥がスロープカーの終点となっている。奉幣殿では一般の参拝者も多く、また神事の妨げにならないよう静かに行動しよう。

奉幣殿を回り込むように右に曲がって下っていくと、英彦山修験道館がある。この付近の植生はミツマタ目立つ。春にはミツマタの花が咲いていたが、現在は名前の通り枝が三又に分かれているのが特徴的で見つけやすい。そのまま進んでいくと、再び歩道に入りスギの植林となる。一度林道を横断し左前の登山道へ進む。この辺りもミツマタが群生している。さらに少し下ると分岐があり、直進すると別所、右は鷹巣原駐車場となっているので右折する。ここからは九州自然歩道となる。まもなく正面に鷹巣原駐車場が現れる。ここから右方面に登り、国道を車に注意して横断して再び自然歩道を通っていく。石垣跡を通過し沢を渡渉すると右に曲がるように沢沿いに登っていく。再び国道を左斜めに横断し、右の自然歩道にはいる。英彦山野営場の中を通過して舗装路から登山道へとんでいくと、右にカヤの草原、左に英彦山青年の家のバンガロー、そして現在は通行禁止になっているが右手のバードライン分岐を通過し、英彦山青年の家に到着する。